

# 「酸性雨観測体制整備の連携」(H18.6~)

【幹事】 宮崎県 環境森林部 環境管理課

【参加県】 福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県、山口県

## 目的

九州・山口各県が共同で酸性雨の観測を行い、広域的な観測体制の整備を図ることで、原因の解明と早期の対応につなげる。

## 取組内容・成果

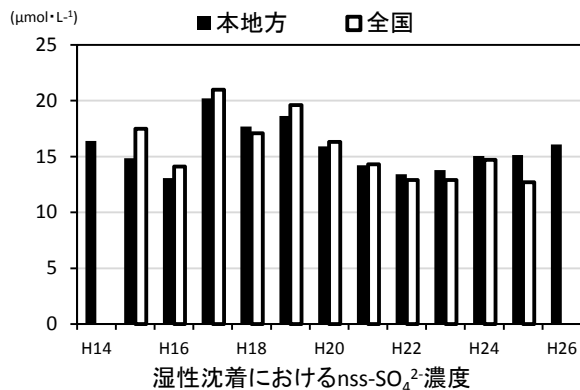
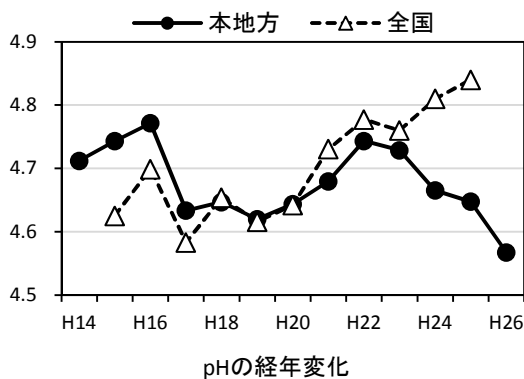
九州・山口各県が共同で酸性雨の測定結果について、データ解析を行い、報告書(第I期から第IV期)を作成。

・本地方のpHの平均値は、4.57(H26)~4.77(H16)の範囲にあった。平成17年度までは全国平均値より高かったが、平成18年度から23年度は全国平均値と同程度かやや低い値で推移し、平成24年度以降は全国平均値では値が上昇しているのに対し、本地方では低下の傾向にあった。

・湿性沈着におけるNO<sub>3</sub>濃度は、夏季に低く冬季に高くなる傾向があり、この変動は九州北部で最も大きく見られた。これは、大陸により近いほど降水がNO<sub>3</sub>イオンを多く取り込んでいるものと推察され、大陸からの影響が重要な因子であることが示されている。

・本地方のnss-SO<sub>4</sub><sup>2-</sup>濃度は、平成19年度から22年度までは低下傾向にあったが、平成23年度以降は一転して上昇傾向となっている。中国においては平成18年度頃をピークに二酸化硫黄の排出量が低下しており、また、桜島の年間噴火回数は平成21年度以降、回数が増加している。

nss-SO<sub>4</sub><sup>2-</sup>濃度の経年変化が、特に近年、中国における二酸化硫黄年間排出量の経年変化と異なる挙動を示し増加傾向にあることは、桜島や阿蘇山など火山からの二酸化硫黄の排出に影響を受けているものと考えられた。



九州地方が大陸からの越境汚染の影響を受けていることが示唆された。

近年、九州南部では桜島からの火山の影響を受けていることも示唆された。

## 今後の課題・取組

酸性雨における越境汚染の影響等を評価するためには長期的なデータの推移を見ていくことが重要であるため、現在の観測体制を継続し、更なるデータの蓄積と解析を行っていく必要がある。

今後も広域的な酸性雨の観測を継続し、光化学オキシダントや火山活動との関係にも留意しながら解析を進めていく。